
しるし

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しるし

【著者名】

Z5533G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

三日月の癌。これは幸運の癌だった。それが娘にもできていって。親子のお話です。

しゆし

「あれ、」の娘

「そうね」

両親は生まれた時にすぐに気付いた。

「こんな所に痣が」

「まあここならいいかな」

生まれたばかりの赤ん坊の右手の甲を見てそれぞれ言つのだつた。

「顔にあるわけじゃないし」

「そうね。それにしても」

若く美しい母親が「ここで言ひつ。

「」の痣。変わった形してゐるわね

「三日月なんてな」

彼女よりは少しだけ年長に見える父親も言つた。

「普通ないよな」

「ないわよ、こんな」

見れば本当に右手の甲にその痣がある。青い三日月の痣が。まるで紋章のようにそこにあるのだった。

「どうしてかしら」

母親は首を傾げざるを得なかつた。

「こんな痣が出るなんて」

「俺に言われてもな」

父親も自分の妻と同じく首を傾げるしかなかつた。

「これは。ちょっとな」

「わからないわよね」

「けれど悪いものじゃないだろ」

だが父親はいつも言つのだつた。

「これはな」

「悪いものじゃないの？」

「月にだって神様や仏様がいるだろ」「

彼が言つたはこうこうことだった。

「そうだろ？ 太陽と同じでな」「

「それはそうね」

「このことは母親も少しではあるが知つていた。昔から太陽や月にはそれぞれ神がいる。ギリシアでも日本でもそこには神がいる。無論仏教でもそれぞれを司る仏が存在している。

「だつたら」

「悪いものじゃないわ」

彼は今度は先程より確かな声になつていた。

「だからな。これについては」

「悲しんだり心配することはないのね」

「お月様が守ってくれるさ」

妻に対してもいつも言つのだつた。同時にその我が子に対しても。

「必ずな」

「そうね。絶対にね」

「この娘はお月様に守られているんだ」

「ここでその我が子を見るのだつた。

「思えば幸せな娘さ」

「そうね。私達だけじゃなくね」

これが海老原美月の生まれた時の話である。彼女は右手の甲に三日月の痣を持つて生まれた。これは成長しても消えず学校に行くようになつても目立つっていた。痣についていつも言われるのだ。

「何か海老原の痣つてよ」

「ああ、何か漫画とかに出て来るみたいだよな」

男の子達はこう言つのだつた。

「紋章とかそういうのだよな」

「右手が光つたりしてな。出て来るそれだよな

「光つたりしないわよ」

美月は笑つてそれを否定する。彼女は小柄で少し垂れ目だが優しい顔立ちをした女の子になつていた。黒い髪をそのまま後ろに垂らしている。

「そんなの

「けれどよ。何かよ」

「お月様にしか見えないしな

「そうなのよね」

「これは彼女が一番よくわかつていた。

「この痣ね。生まれた時からあるのよ」

「生まれた時からかよ」

「ええ。生まれた時から

「このでその痣を見るのだった。やはり右手の甲にやの青い三田円を見せている。

「あつたのよ。ずっとね」

「またそりや変わつてるな」

「普通ねえだろ」

「お父さんとお母さんは私がお月様に守られてる証拠だつて言つたれど」

自分でもそれは聞いているのだった。両親は今でも彼女にこう話す。

「けれど。私は別に」

「気にしちゃいないってか?」

「気にはしているわ

「それはそれ、これはこれだつた。

「けれどね。別にお月様に守られてるなんてのは

「考えてねえのか

「誰だつて同じじじゃない

「そしてこう呟いて言つてたのだった。

「このひつひつて。それでしょ?」

「まあそうだよな

「それはな
皆も今の美円の言葉に頷く。言われてみれば確かにその通りであ
る。

「結局誰だつてな」

「同じだよな、人間なんだからよ」

「けれどこの癌は」

美月は皆同じと言つたうえでまたその癌を見るのだった。
「ずっと一緒になのよね」

「嫌か?」

「それはないわ」

実はそれはないのだった。生まれた時からあるしそれで別にいじめられたり意地悪をされたこともない。何しろ形が形なのでまるで漫画みたいだと今のように言われることはあってもだ。それでもこの癌が原因で何かをされたということはなかつた。だから愛着さえあつた。

「けれど。私だけなのよね」

ふと寂しい顔を見せた。

「この癌があるのつて。お父さんにもお母さんにもないし」

「やっぱり何かあるんじやねえのか?」

「月の戦士の証とかよ」

「だから。そういうのじゃなくて」

漫画的な話から離れない男の子達に対してもい返す。

「この癌。お兄ちゃんにも妹達にもないし」

「普通はないよな」

「そこまで見事な形の癌はな」

「私だけなのよ」

「このことをまた言つ。寂しい顔で。

「この癌。どうしてあるのかしら、本当に」

考えてみれば不思議なことである。成長するにつれそうしたこと
も考えるようになつっていた。だがそんな時だった。彼女の叔母、母

の妹が家に尋ねてきた。美月は母親似であるが彼女もまた姉によく似ていた。その叔母がやつて来たのである。

「美月ちゃん相変わらず元気みたいね」

「ええ」

まずはその自分によく似た叔母に挨拶をした。

「叔母さんも元気みたいね」

「私もね。悪いことに旦那も元気で」

叔母はここではふざけてきた。

「今日も野球を観に行つたわよ」

「野球に?」

「阪神の試合にね」

言いながら顔を苦笑いにさせる叔母であった。

「全く。野球はパリーグよパリーグ」

「パリーグなの?」

「それも鷹よ」

実は彼女はホークスファンなのだつた。美月も他の一族も皆セリーグで阪神を応援しているが彼女だけはホークスファンだ。異端と言えば異端である。

「巨人応援するよりずっとましだけれどね。それで私は行かなかつたから」

「ここに来たのね」

「そういうこと。まあ美月ちゃんが元気そうでよかつたわ」

「それはね」

「相変わらずその痣も格好いいし」

彼女もまた美月の痣について言うのだった。

「何よりだわ」

「この痣ね」

「嫌なの?」

俯いてその痣を見た美月に対してもう一つ尋ねた。

「その痣。別にいじめられたりしてないんでしょ?」

「それはないけれど」

隠すことなく答えた。

「けれど。どうしてこんな痣が」

「ああ、それね」

叔母は困った顔になつて、いつ美月に対しても声を明るくさせてきた。
「私にあるわよ」

「叔母さんにも！？」

「そりよ、あるわよ」

叔母は明るく笑いながら美月に話す。

「ちゃんとね」

「何処に？」

「ほら、ここよ」

「」で首のところを見せてきた。見ると左の首筋の奥に彼女と同じものがあった。

「ほらね、ここにあるでしょ」

「本当・・・・・」

「実はこれって遺伝なのよ」

「」美月に話す。

「お姉ちゃんから聞かなかつたの？」

「全然」

実はそうした話も今聞いた。今まで全く聞かなかつた話である。
「」の痣がお月様に守られてる証だつて言われたことはあつたけれど

「」

「何よ、それ」

叔母は彼女のその話を聞いて屈託のない笑顔になつた。

「私がお母さんに言われたのと同じじゃない」

「叔母さんのお母さんつていうと」

美月は彼女の話を聞いて考えだした。答えはすぐに出た。

「お婆ちゃんに？」

「お婆ちゃんのお姉ちゃんにも同じ痣があるのよ」

「大叔母さんにも
血筋はさらにさかのぼっていた。
「」の痣があるの
「あるわよ。あの人は背中にね
「ふうん、そうなの
「だからね。この痣はね
美月にさりに話す。

「代々伝わっているのよ。家系にね」「そういうのだったの」「どうしてお姉ちゃんは話さなかつたのかしら」叔母はそのことを不思議に思いはじめた。

「知つてゐるのに」「お父さんに遠慮したのかしら」

「お父さんに遠慮したのかしら」
美月はこう考えた。

「こうした癌が家系に引き継がれていくつてやつぱり変わつたこと
だし」「隠す必要もないと思つけれどね」「お母さん遠慮する性格だから」「昔からね」

「こうしたことは妹である彼女の方がより知つてゐるよつてある。また明るい笑顔になつた。

「そうなのよね。お姉ちゃん謙虚でね」「私にも偉そくにするなつて言つわ、いつも」「それでいいのよ」「だがそれでいいとも言つたのだった。

「それでね。人間偉ぶつても何にもならないから」「それは何となく」

「彼女にもわかつた。偉そくにしている人間は周りから好かれないことは学校のある教師を見ていてわかることだつた。そうした教師は残念なことに実に多い。

「わかるけれど」「だからあんたにも言わなかつた」「彼女にもわかつた。

「そういうことね。けれどね」

「ええ」

そのうえでさうに話をするのだった。美月もその話を聞く。

「この痣。あんたが結婚してね」

「私に子供が生まれたら」

「出るかも知れないわよ」

「こり話すのだった。

「女の子だけに出て出るのは兄弟で一人だけだけれど」

「ひょっとしたらなの」

自分の右手の痣をここに見た。その痣を。

「この痣が」

「私の娘にもあるから」

叔母は自分の家族のことも話した。

「左肩にね。あるのよ」

「左肩に」

「それで悪いことは何もないし」

「そうね。何か漫画面みたいだつて言われたことはあるけれど」
右手の甲を顔に近付けてさらにもじもじと見る。覚えている限り
この痣でいじめられたりからかわれたりしたことはない。漫画やゲ
ームの設定のようだと言わたることはあってもだ。形が神秘的な
でそういうふうに言わたることは今までないのだ。

「それでもね」

「私もよ。だからね」

「娘に出ても気にしなくていいのね」

「そういうこと」

結論としてはそうだった。

「それでね。いいから」

「そうなの。じゃあ」

「さて、誰に出来るかしらね」

「叔母はここにことして美月に話す。

「あんたが結婚して子供ができるなら誰に

「「Jの痣が
「Jの痣が出てる娘には本当によいことがあるしね
「本当にって！？」
「いい相手が来るわよ
こう美月に語るのだった。
「私の旦那みたいにね
「叔母さんの旦那様みたいに」
「ホークスファンなのは御愛嬌」
実はそのことには案外悪こよひには思つてこないようである。

「それ以外はイケメンだし背は高いし性格は男らしくて」「うん」

「しかも何をやっても器用だしね。自慢の旦那よ」「私もそういう人に出会えるの」

「その痣は月の神様が護ってくれてるって証よ」「母と同じことを言つてきた。

「だからね。そのことは安心していいわ」「わかつたわ。それじゃあ」

「またその痣を見ながら叔母の言葉に頷く。「そうした人に会えるのを楽しみにしてるわ」「絶対にね」

叔母との話で気持ちが完全に楽になつた。何故あるのかといつことがわかつてしかもそれでいいことがあるとも言われて。気が楽になつた彼女はそれからさらに明るくなつた。その明るさは周りの評判になつていつた。

それは成長してから、学生から働くようになつてからも変わらなかつた。そうして勤めていた会社で素晴らしい人出会い系で結婚することになつた。彼は美月が見たこともないような人間で性格は仏のようだつた。外見も穏やかでとてもいい印象を与えてくれるものだつた。

その彼と出会つてからはすぐだつた。結婚して一生を共に暮らすことになつた。彼女はまず男の子を産んだ。そして暫くして二人目を妊娠した。この時に彼女は夫に言つのだつた。

「女の子だったらね」

「何があるの?」

「ほら、これ」

ここで自分の右手のその三日月の青い痣を見せる。

「「」の痣だけれど

「その痣がどうかしたの？」

「結婚する時に話したわよね」

「彼女はこのことには遠慮せず全てを話したのである。

「私の家系にその兄弟で一人、女の子に絶対に出る」

「その痣だね」

「そう、「」の痣よ」

痣を見せながら話を続ける。

「若し。今度生まれるのが女の子だつたら」

「出るかも知れないんだね」

「ええ。楽しみにしてるといいわ

「三日月の幸せの痣」

美月はその痣をこう呼んだ。

「「」の娘が女の子だつたらひょっとしたら

「出で来るのかも」

一人でそのことを考えていた。そうして子供が生まれた時だつた。

「どうだつたの？」

「男の子か女の子かつてこと？」

「ええ。どつちなの？」

美月は最初に夫にそのことを尋ねた。

「男の子なの？女の子なの？」

「女の子だよ」

夫は笑顔で妻に告げた。

「ほら、ここにいるよ」

「あつ、そうね」

美月は今産後の床にいた。白い病室で同じく白いベッドの中に横たわっている。出産でかなり疲れているがそれでもしつかりしていた。夫とも話すことができた。

「「」の娘に」

「痣だけれど」

「わからないかしら」

出産の時はいささか難産でそれを確かめるどころではなかつたのだ。それで今夫にそのことを尋ねているのである。

「あるのかどうかは」

「あるよ」

しかし夫は妻にこう答えたのだった。

「癌はね。ちゃんとね」

「あるの？」

「うん、ほら」

こう言つてその赤ん坊が寝かされているベッドがそつと近付けられた。すると美月は自分の娘の左手を見た。するとそこには。

「この娘はそこなのね」

「うん、ここにあつたよ」

また妻に話した。

「ここにね」

「この娘は左手なのね」

見ればそうだった。娘には左手にあるのだった。

「それもそこに」

「君は右手の甲で」

「この娘は左手の手の平」

「ある場所は逆だね」

右に左、それに甲に平だった。場所は確かに逆だった。

「けれどそれでも」

「癌の形は一緒」

それはその通りだつた。

「癌は一緒なのね。やつぱり」

「そうだね。癌の形はね」

三日月の青い癌はそのままだつた。それは変わらなかつた。場所は正反対だがそれでも癌は同じだつた。それだけは同じだつたのは。

「一緒だよ」

「しるしは同じ」

美月は穏やかな、それでいて優しい笑顔で語った。

「母娘だからなのね」

「そうだね。親子だから」

「ええ」

夫の言葉に静かに頷く。

「そうね。一緒なのね」

そのことを見るのでした。ある場所は違つてもそれでもそれは同じだから。

「それじゃあこの娘も」

「将来。幸せに」

「なれるわ。私みたいに」

今度は娘の顔をじっと見ていた。その顔もまた美月と同じだった。母娘の絆はしるしによって生まれた時から確かにになっていた。美月はそのことも喜んでいたのだった。

しるし
完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5533g/>

しるし

2010年10月8日15時33分発行